

図 6. 2011 年東北地方太平洋沖地震時の水平変動(赤)と、それ以降の余効変動(青)、および地震前と地震後の地殻変動直線成分の勾配の変化量(緑)。地震時の変動は北のほうが大きいですが、それに比べると余効変動や勾配の変化量は南北による差が小さい(東京大学[課題番号:1404])。

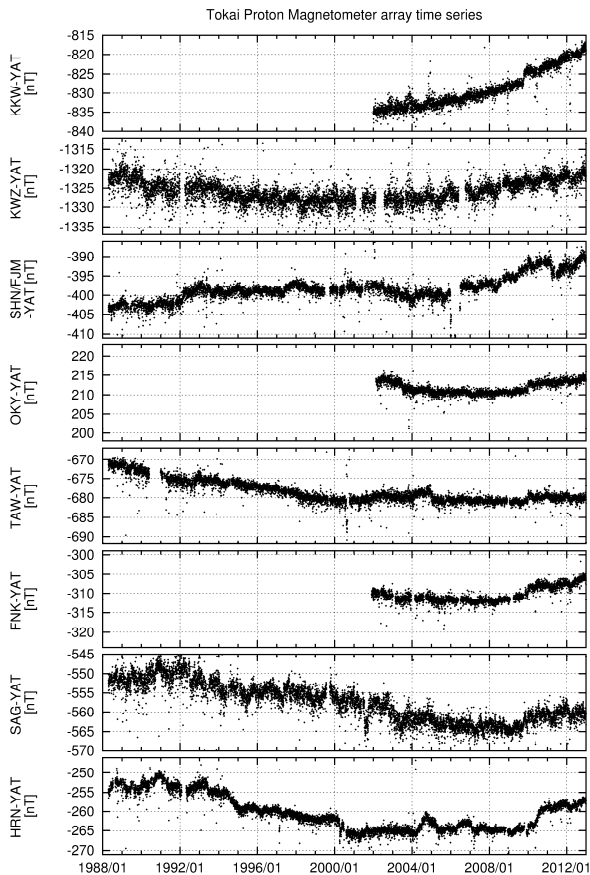


図 7. YAT を基準とした 1988 年 4 月から 2012 年 12 月までの全磁力時間変化。上から KKW, KWZ, SHN/FJM, OKY, TAW, FNK, SAG, HRN (東京大学 [課題番号:1404])。

Hi-net鳳来(56.9 km) 3ヶ月スタック 振幅変化と走時変化(2004年~2012年)

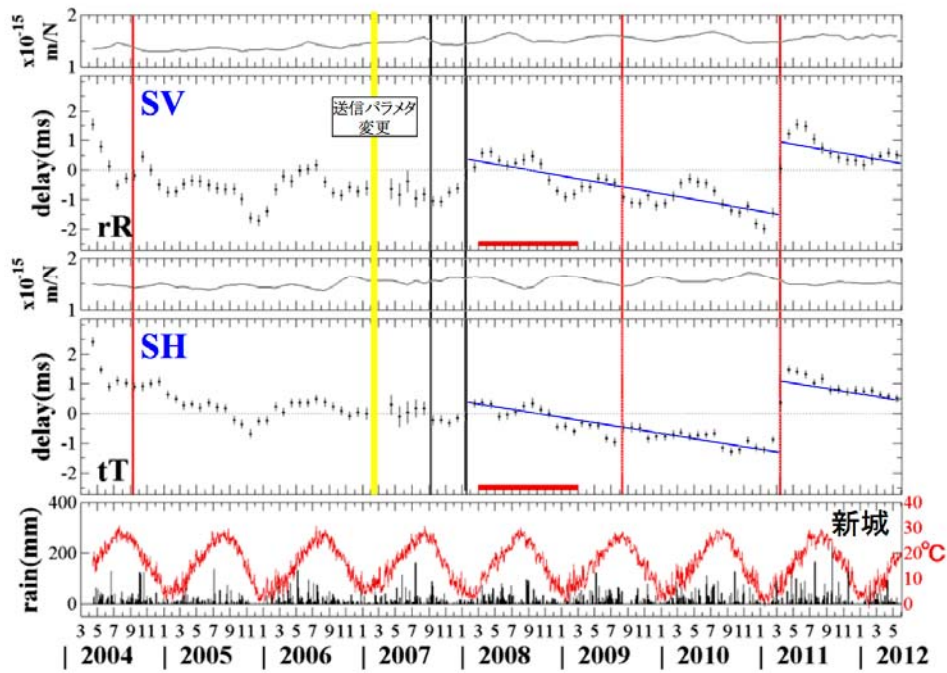


図 8. 土岐のアクロス震源と Hi-net 鳳来の間の伝達関数の S 波走時の時間変動。2011 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震で約 2.5 ミリ秒の遅れが見られる。また 2008 年以降は定常的な走時の早まりが見られる（名古屋大学 [課題番号：1701]）。

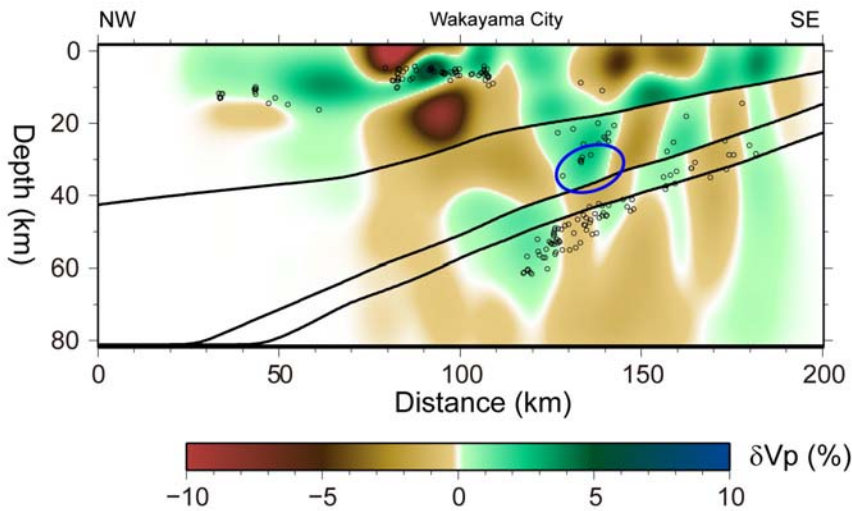


図 9. 潮岬-田尻測線断面での P 波速度の初期モデルからのパータベーション。初期モデルは JMA2001（上野・他，2002）を基準とし、海洋地殻の速度を-5%、海洋マントルとマントルウェッジの速度を+5%と与えている。○はトモグラフィに用いた地震のうち断面の近傍で発生したものを表す。太線は上から大陸モホ面、海洋地殻上面、海洋モホ面を示す（京都大学 [課題番号：1801]）。

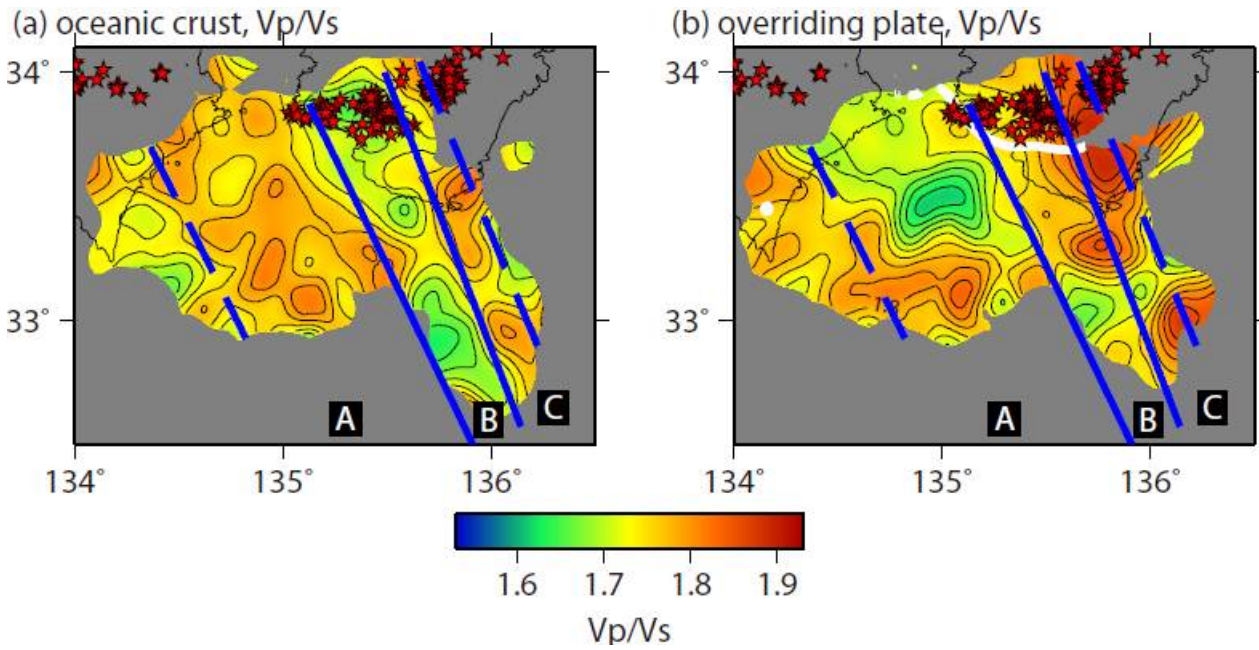


図 10. 沈み込む海洋プレート内 (a) と陸側プレート最下部 (b) の V_p/V_s 比の分布 (東京大学 [課題番号: 1403]) 。

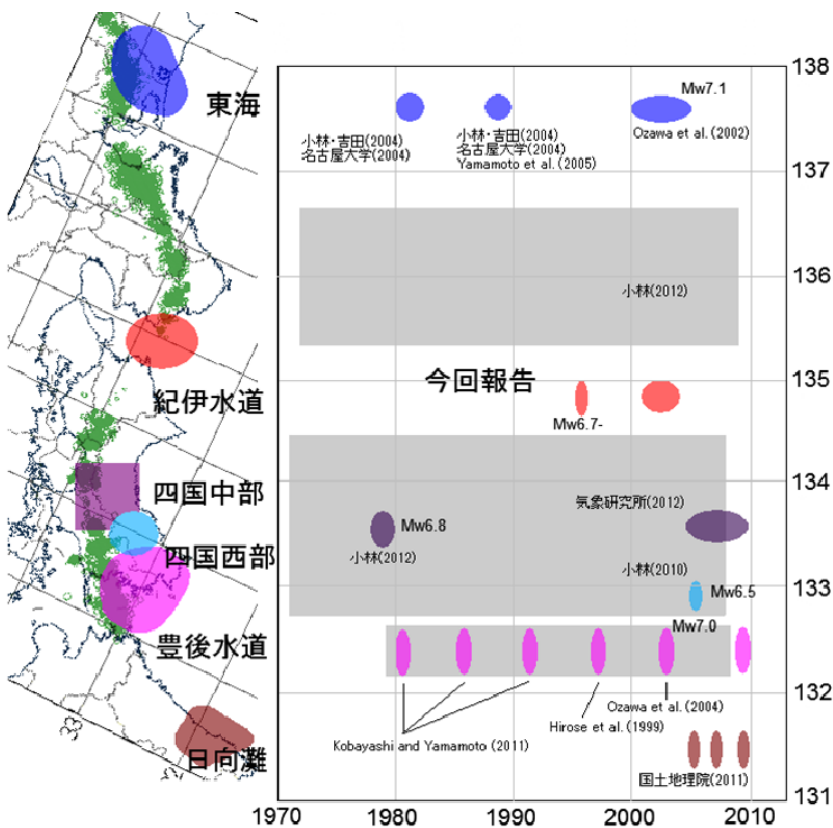


図 11. 南海トラフ沿いの長期的スロースリップ発生場所と発生時期。矩形の灰色は水準・潮位を用いて調査済みの期間・領域を示す (気象庁 [課題番号: 7011]) 。